

選択的实在論の限界はどこか

工藤怜之 (Satoshi Kudo)
東京大学大学院総合文化研究科

科学的事実論争は様々な論点が複雑に関係した論争であるが、事実上の最も中心的な争点は、いわゆる悲観的帰納法をめぐるものであると言ってよいだろう。過去に大きな経験的成功を収めながら、後になって重大な誤りを含んでいたとみなされるようになった科学理論が多くあるとすれば、現在の理論についてもまた、経験的成功を根拠に、その(近似的)真理性を信じるべきではないのではないか。このような論点が1980年ごろに大きく取り上げられてからは、これにいかに応答するかが、实在論者の取り組むべき最も重要かつ困難な課題とみなされてきた。

悲観的帰納法に対する応答法は、大きく分けて三つほど考えられる。第一に、そもそも帰納的推論としての妥当性に対する疑念がある。悲観的帰納法を一種の統計的推論として解釈した上で、その妥当性を疑う議論がこれまでに提起されているし、そもそも統計的推論としてきちんと定式化できるかどうかとも疑わしい。しかし、どういふわけか、このような理由を持ち出して悲観的帰納法を相手にしないという方針は支持を得ていないようである。第二に、反实在論者のリストアップする、成功したのに誤っていた諸理論について、それらは大した成功を収めていなかったと応答することが考えられる。実際、多くの实在論者はこの方針を採用し、新奇な予言に成功するほどの理論でない限り、真理性を推論するには値しないのだと主張している。しかし、实在論者たち自身、これだけで悲観的帰納法への応答として十分だとは考えていない。Fresnelの光学理論のように、新奇な予言に成功するという文句なしの経験的成功を収めながら、誤りを認められるに至った例が残ってしまうからである。そこで、第二の応答方針に加えて、第三の応答として、Fresnel理論のような例を、「間違っていたのに成功した理論」ではなく、「十分に正しかったから成功した理論」に分類しかえすことが目指される。

とは言っても、Fresnelがエーテルの实在を措定していた点で決定的に誤っていた、という点は否定しがたい。そこで、实在論者たちは、Fresnel理論は確かに誤りを含んでいたと認めつつ、それでも部分的には正しかったし、だからこそ成功したのだ、と主張しようとする。そして、過去の成功理論をそっくりそのまま信じるのではなく、限定的・選択的に信じていたならば、その部分に限っては悲観的帰納法を免れえたのではないか、という理論変遷のパターンを期待する。このように、各理論の全体をそのまま信じるのではなく、一部分に対してのみ限定的・選択的に实在論的態度を取るべきだと考える立場は、「選択的实在論 (selective realism)」などと総称されている。

以上のように、悲観的帰納法をまともに受け止めるならば、实在論者は何らかの形の選択的实在論に行き着かざるを得ないように見えるし、実際、多くの論者たちが選択的实在論を擁護しようとしてきた。ただ、当然ながらここで問題になるのが、理論

に関する信念の選択・限定の基準である。選択的実在論者は理論の一部だけを選択的に信じなさいというが、どの部分信じべきで、どの部分信じないのか。様々な実在論者が異なる基準について論じ、実在論者同士でも批判し合っているが、**Kyle Stanford** は、いくつかの代表的な選択的実在論の基準について検討し、結局はどのような選択的実在論もうまくいかないのではないかと批判した。**Stanford** によれば、選択的信念の基準は、一般に、事後的・回顧的であってはならない。すなわち、過去の成功理論のどの部分信じべきで、どの部分信じないでなかったかという問いに対して、実質的に、現在まで維持されている部分は信じべきで、現在は放棄されている部分は信じないでなかったと答えることになるような基準を提示してしまえば、実在論の擁護にはならない。そして、そのような事後的でない基準を提示するという課題をどの選択的実在論者も達成できていない、と **Stanford** は論じる。

本発表では、**Stanford** による選択的実在論批判の妥当性を検討することを通じて、選択的実在論をめぐる議論の応酬がどのような構造を持つかを明らかにすることを目指す。そのために、選択的実在論の一例として、**Anjan Chakravartty** の準実在論 (semi realism) を取り上げ、それが **Stanford** の批判を免れているかどうかを検討する。**Chakravartty** は、選択的信念の基準は事後的ではないという条件を受け容れており、かつ、**Stanford** の直接の批判対象とはなっていないからである。**Chakravartty** は、理論 (方程式) の「最小限の解釈」という概念を持ち出して、悲観的帰納法を回避しようとする。例えば、**Fresnel** の方程式群は確かに経験的に成功したけれども、それを弾性的なエーテルの挙動に関するものと解釈することは、最小限の要請を超えていた。エーテルの措定自体は、現象の説明には確かに寄与するし、研究を進める上で発見的な役割を果たしうるという点で決して無駄・余計だったわけではない。しかし、経験 (理論的対象・因果的プロセスの検出) に照らして方程式を最小限に解釈すれば、エーテルの実在を誤信せずにすんだはずだ、と **Chakravartty** は言う。最小限の解釈という概念は (少なくとも発表者の理解しうる限り) 非常に曖昧であるが、そこに目を瞑ったとしても、**Chakravartty** の議論に対する疑問は容易に思い浮かぶだろう。**Fresnel** をはじめ、19 世紀の多くの科学者たちが最小限の解釈を見誤っていたのに、現在の準実在論者ならば正しい解釈を与えられると信じる根拠は何か。**Fresnel** の解釈は最小限を超えているから正当でなく、**Chakravartty** の解釈は正当であると論じる根拠は、まさに **Fresnel** の解釈が既に放棄されたことにほかならないのではないか。こういったことを考えると、やはり **Stanford** の言う通り、準実在論も選択的信念の事後的でない基準を提示できているとはいいがたいように思われる。

しかし、ここで、選択的実在論の一種類に過ぎない準実在論の「失敗」からもう一步踏み込んで、この議論の一般的構造を反省することが重要である。最小限の解釈というアイデアが一例であるところの、選択的信念の基準を提示することは、実質的に、確証の規則 (別の言い方をすれば、帰納の規則) の提示に相当することに注意されたい。すると、この課題を (基礎づけ主義的な仕方) で遂行することは、そもそも不可能であるように思われる。確証の規則の正当化がある意味で無理な要求であり、悲観的帰納法への応答が確証の規則の提示を要求するとすれば、悲観的帰納法への応答は (懐疑論への応答と同じ意味で) そもそも引き受けなくてよい課題なのではないか。